

秦明登氏は「私は現在、呼吸器腫瘍内科主任部長および治験・臨床研究支援センター長として、多くの高齢がん患者に治療機会と安心を届けるべく、診療と研究の両面から体制構築を進めています」と語る。

「高齢だから仕方がない」「年齢を考えると標準治療は難しい」といった言葉が未だ臨床の場で聞かれる。しかし、果たしてそれは患者本人の真の希望だろうか。高齢者であっても、「治療できる可能性があるなら挑戦したい」と語る患者は少なくない。神戸低侵襲がん医療センターは、そうした声を正面から受け止め、年齢ではなく個々の患者の体力・生活背景・価値観に応じた治療を提供することを使命としている。

日本は世界でも類を見ない速度で高齢化が進行し、がん医療の主戦場も大きく変わりつつある。とりわけ肺がんにおいては、診断時の年齢が75歳を超える患者が半数に達し、「高齢である」というだけで治療選択が制限される現実がある。そうした中で、医療産業都市構想を推進する神戸市のポートアイランドという医療・学術の集積地に位置する神戸低侵襲がん医療センターは、「小さく見つけて、やさしく治す」という理念のもと、患者の身体的・心理的負担を極限まで抑える治療を追求してきた。

藤井正彦理事長は、センター創設以来「医療とは、病を治すだけではなく、患者の人生に寄り添う行為でなければならない」との信念を掲げている。その言葉は、日々現場で患者と向き合う医療者の指針であり続けている。

高齢であっても治療を諦めない

神戸低侵襲がん医療センターの挑戦



高齢者こそ、
選択肢を奪われない医療を届けたい

医療法人社団 神戸低侵襲がん医療センター

治験・臨床研究支援センター長 秦 明登

「小さく見つけて、やさしく治す」 低侵襲医療の理念



神戸ポートアイランドに位置する神戸低侵襲がん医療センター。
研究と臨床が融合する拠点

神戸低侵襲がん医療センターは、開院当初から「切らずに治すがん医療」の実践を掲げ、高精度放射線治療、画像下血管内治療など、侵襲を最小限に抑えた治療技術の導入を進めてきた。がん医療の進歩は、高齢患者の治療選択を大きく変える可能性を秘めている。年齢的、体力的、身体的な合併症などの理由から治療を断念せざるを得なかった患者も、現在では日帰りまたは短期入院で治療を終えられる手法が現実のものとなっている。

放射線治療の分野では、高精度画像誘導技術の進歩により、定位放射線治療（SRT）や強度変調放射線治療（IMRT）のように、腫瘍を狙い撃ちし、周囲の正常組織への影響を最小化する放射線治療が可能となった。実際、通院しながら治療を

継続し、普段通りの暮らしを維持したまま寛解に至る高齢患者の姿は決して珍しくなくなってきた。

「年齢によって治療の扉が閉ざされるべきではありません。高齢であっても、挑戦する意思を持つ患者に寄り添いたいのです」と、秦センター長は力強く語る。

神戸のポートアイランドという立地の特性を活かし、周囲の医療機関や研究機関との連携によって、常に新たな技術の検証と実装が繰り返されてきた。「最先端の治療とは、患者さんに過剰な負担をかけない技術のことです」との姿勢は、センター全体に浸透している。

「待たせない・断らない」 ——高齢者の不安を減らす医療運営

高齢のがん患者にとって、診断から治療開始までの時間は、単なる「待機期間」ではなく、不安と孤独が増幅する時間である。症状の変化を感じながら「このまま進行していくのではないか」「治療を受けられないのではないか」といった思いを抱く患者は少なくない。そうした心理的負担を軽減するため、同センターでは「待たせない・断らない」という理念を組織運営の根幹に据えている。

開業医や近隣医療機関から紹介を受けた患者に対しては、原則として3日以内、遅くとも1週間以内に専

門医による診察を行う体制を整えている。紹介元の医師にとっても「紹介した患者さんがすぐに診てもらえる」という安心感があり、地域医療連携は年々強化されている。

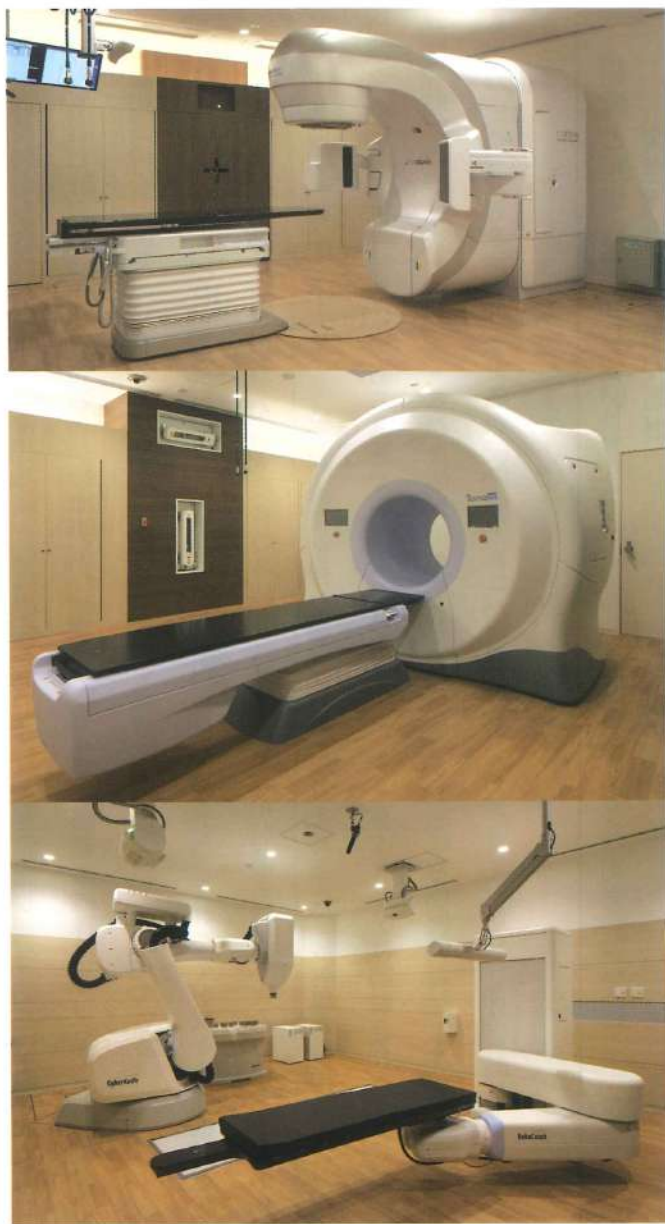
藤井理事長は「医療は技術ではなく、生き方に寄り添う営みである——この姿勢は当センターの全スタッフが共有する価値観です」と述べる。

また、がん専門施設であるからこそ、「断らない」姿勢は明確に示されるべきである。他院で治療が難しいと判断された高齢患者や、合併症を有する患者もまず受け入れ、治療の可能性を多角的に検討する。「出来ない理由」ではなく「出来る方法」を探る姿勢は、多職種連携の核となっている。

高齢患者は生活背景に複雑な事情を抱えており、治療そのものよりも「通院ができない」「介護者が不在」といった社会的要因が障壁となることも少なくない。そのため同センターでは、単に医学的適応のみを判断するのではなく、「治療にたどり着くプロセス」を支える体制を整え、ソーシャルワーカーの早期介入や地域包括支援センターとの連携を積極的に行っている。

臨床試験という「希望の医療」 ——国際水準の研究を神戸から

臨床研究は、これまで「若年でPS（全身状態）が良好な患者を対象とするもの」と考えられてきた。しかし高齢者が治療を受ける機会を奪われない社会を実現するには、「高齢者も臨床試験の主体である」という発想の転換が必要である。研究は一部の施設や限られた患者だけのものではない。



同センターが誇る3つの照射装置（上からトゥルービーム、トモセラピー、サイバーナイフ）。症例ごとに最適な線量・照射方式を選択できる体制

神戸低侵襲がん医療センターでは、治験・臨床研究支援センターを設置し、高齢者にとっても参加しやすい研究体制を整えている。秦センター長は肺がんを専門とする呼吸器腫瘍内科医として、またセンター長として臨床試験を「新薬の検証」ではなく、「患者が希望を再認識する機会」と捉えている。

「もう歳だから」という言葉を、患者さん自身の口から出させないこと。それこそが我々の挑戦の意味です」同センターが主導し、西日本がん研究機構の多施設共同で行われた医師主導治験WJOG11819L(Evolution Trial)は、高齢者を含む進行肺がん患者を対象に、放射線を併用しない免疫化学療法を評価し、世界的権威のある雑誌であるLancet Oncologyに掲載された。この国際的評価は、現場の医療者と患者に大きな自信と誇りをもたらした。「研究は遠い世界の話ではなく、ここ神戸から世界へ発信できる」という実感が院内に生まれた瞬間であった。

研究と現場は対立しない

次世代治療戦略の創出

「診療と研究は相反するものではない」。これは同センターの基本精神である。現場での違和感や疑問こそが新たな研究の出発点であり、研究によって得られた知見は再び診療の質を高める循環を生む。Evolu

tion Trialの成功以降、院内では各部署が「これは研究に転化できるか」という視点を持ち始めた。

高齢患者の診療を可視化するため、同センターはリアルワールドデータ(RWD)の収集を積極的に進めている。高齢者の治療は、教科書的な症例とは異なり、多様な身体機能や生活背景を含む。こうした変数を記録し解析することで、「高齢者に最適化した治療指標」が見えてくる。

秦センター長は、「治療の結果だけではなく、その過程を支えるのが医療者の役割です。安心して治療に進める道筋を整えることも医療そのものです」と語る。

AI解析やデータ管理システムの整備も進み、「経験や勘」だけに頼らない治療判断が可能になりつつある。患者情報、生活支援、臨床研究の全てが統合された「神戸モデル」は、今後の高齢がん医療の指標になると考えている。

未来への展望

「神戸モデル」としての高齢者がん医療

がん医療は、単なる治療手技の提供ではなく、患者が「どう生きたいか」を伴走しながら共に考える営みである。高齢患者であっても、治療法の選択権を持ち、自らの意思で次の一步を選び取ることができる社会

PROFILE

秦 明登 (はた・あきと)

1976 年生まれ、福岡県出身。
 2002 年 3 月、神戸大学医学部医学科卒業。
 2002 年 6 月、西神戸医療センター研修医。
 2004 年 6 月、市立加西病院内科医員。
 2006 年 4 月、神戸市立中央市民病院呼吸器内科専攻医、および先端医療センター総合腫瘍科専攻医（兼任）。
 2009 年 4 月、先端医療センター総合腫瘍科医員。
 2011 年 4 月、先端医療センター総合腫瘍科副医長。
 2016 年 4 月、先端医療センター総合腫瘍科医長。
 2017 年 11 月、神戸市立医療センター中央市民病院腫瘍内科医長。
 2018 年 10 月、神戸低侵襲がん医療センター呼吸器腫瘍内科部長。
 2021 年 10 月、神戸低侵襲がん医療センター呼吸器腫瘍内科主任部長。
 2025 年 4 月、神戸低侵襲がん医療センター副院長兼呼吸器腫瘍内科主任部長。

資格・所属

内科認定医、総合内科専門医、呼吸器学会専門医、がん薬物療法専門医、呼吸器学会指導医、がん薬物療法指導医。

2011 年「緩和ケアの基本教育のための指導者研修会」修了。

日本内科学会、日本臨床腫瘍学会、日本癌治療学会、日本呼吸器学会、日本サポーターケア学会、International Association for the Study of Lung Cancer (IASLC)、European Society for Medical Oncology (ESMO)、American Society of Clinical Oncology (ASCO)、Multinational Association of Supportive Care in Cancer (MASCC)。

INFORMATION

医療法人社団 神戸低侵襲がん医療センター

URL <https://www.k-mcc.net/>

所在地 〒650-0046 神戸市中央区港島中町 8-5-1
 TEL 078-304-4100 FAX 078-304-0041

アクセス ポートライナー「市民広場」駅より徒歩 5 分

設立 2013 年 4 月

診療科等 放射線治療科、放射線科、腫瘍内科、呼吸器腫瘍内科、耳鼻咽喉・頭頸部外科、消化器内科、リハビリテーション科、歯科口腔外科、泌尿器科、脳神経外科、精神神経科、緩和ケア内科、食道胃腸外科、肝胆膵外科、乳腺外科

病床数 80 床（一般 60 床・地域包括ケア 20 床）

診療時間 〈月～金〉9:00～17:00
 〈休診日〉土・日・祝

基本理念 「小さく見つけてやさしく治す」
 一患者さんに低侵襲で最良のがん医療を提供する一



治験・臨床研究支援センターのスタッフ。Lancet Oncology 掲載へと繋がった研究文化は同センターの実務力と臨床現場の研究への熱意から生まれた

こそ理想である。

神戸低侵襲がん医療センターは、その実現に向け、データ、技術、そして人の心を繋ぐ医療を追求してきた。AIやICTの活用、国際共同研究の推進といった先端的取り組みを導入しつつも、「患者の不安に丁寧に向き合う」という姿勢を決して失わないことが、神戸低侵襲がん医療センターの最大の特色である。

「ここなら安心して任せられる」と高齢患者が感じられる医療機関を目指し、神戸から新しいがん医療の姿を世界に発信していく。もう歳だからを医療現場からなくす——その一步を、同センターはすでに踏み出している。